

## 同志会で学んだこと

下山寛美

## はじめに

私は同志会が大好きだ。事実を積み上げ、人のことを鵜呑みにせず、確かめずにはおかない、という研究態度が大好きだ。偉い人がいなくなつて皆共同研究者。入門講座さえ提案者。初心者も古狸もみんな対等平等同じ仲間だよ。言いたい事を言っていんだよ。こんな同志会が大好きだ。それに、いつも実技と子どものお話をしてくれる荒木先生が大好きである。

そこで、荒木先生や諸先輩との長い付き合いの中で、みんなから聞いたり自分が体験したりしたエピソードや研究の進め方や指導方法などについて書くことでその任を果たさせていたいただきたいと思う。

聞き違いや、思い込みもあると思うがご容赦のほどよろしくお願いしたい。

## 荒木先生の人柄

大酒のみである。なんせ伊藤、永井の3先生で飲んだ金額を合わせれば家が何軒か建つとか。「中村は酒は飲まないで家で本を読んで勉強していた。俺らは飲みながら議論して勉強した。」（？）でも荒木さんが読んでおられる本の量も桁が違う、本を読むと知ったかぶつてすぐ話す。聞いたほうは癪だから本屋で探してこつそり読む。というように本を競争で読まれたそう。またポケットに入つてるお金を手に握り「いつせのせ」で出して何円あるから焼酎一杯と肴が一品飲めると言うような飲み方

もされたそうだ。そんな裸の付き合いができる友達がいることがとっても羨ましく感じられた。

丹下先生（同志会の創始者）のゼミで1週間に1度は必ずレポートを持って参加しなければならず、それがなかなか書けないでどっかに雲隠れして…、ということもあつたとか。荒木先生にもそんな時代があつたのかとレベルが違うのに安心したりして。何となく勉強すれば近づけるかなという希望を持ちたりもした。

「下山君、元気だったかい。勉強したかい。」

最初に夏大会に参加した次の年の夏大会でのことであつた。大体私なんぞは駆け出しのペーパーで、そんな偉い人に名前を覚えてもらえるなんて夢にもおもわないものだから、とっても感激してしまつた。全国大会の夜はたいていどこかの部屋にいろいろな支部が集まつて話に花を咲かせる。今考えれば人と人とのつながりをとつても大事にされていたんだと思う。ただ実践を持つてきて、報告して検討してそれでおしまいではなく、研究し合う仲間だよつてことを感じさせてもらつていたんだと思う。私はいたつて気が弱いもんで隅つこのほうで小さくなつていたが、時々大きい屁が出たり、駄洒落が出たり、とっても楽しかつた。

## 実践で確かめる

「きき足が決まるのは大体3年生以降だよ。だからハドルは4年生以後に教えたほうがいいよ。」

そうか側転は聞き足が決まらない3年生までに教えたほうが両方できていいぞ。

「幼稚園で、毎日を鍛えようとして園の周りを走らせた所があつたんだけど、骨がしつかりしないうちに長い距離を走らせ、筋肉が発達したものだから、骨が曲がつてがに股になつちやつたんだよ。」

教材には適期がある。知らないということは恐ろしいことだ。

「足の速さはストライドで決まるんだよ。ピッチはおとな子どもでも大して違わないんだよ。階段を走らせて見れば分かるよ。ピッチを上げるには急な坂でも走らせればいいんだ」

もちろん足幅をできるだけ広げ、早く動かせば早く走るなんてことは、誰でも分かることだ。しかし早く走ろうとするとき、歩幅を広げようといつた誰が意識するだろうか。大体の人は足を早く動かそうとするのではなく、ストライドを広げることと、ピッチを早く